

住環境調整の歴史（その1）「森鷗外と建築環境工学」

1. 森鷗外の略歴

森林太郎（1862～1922，号は鷗外）

- 1862（文久2）年 石見国津和野藩主亀井家の典医森静男と峰子の長男として生まれる。
- 1872（明治5）年 父とともに上京。私立学校進文学社に通いドイツ語を修める。
- 1874（明治7）年 第一大学区医学校（のちの東京医学校予科）入学。この時13歳で、年齢が2歳不足していたため、1860（万延元）年生まれとして入学が許可。これ以後、公務・軍関係の履歴書には、東京府士族万延元年生まれとした。
- 1881（明治14）年 東京帝国大学医学部卒業（席次は8番）。陸軍省出仕。軍医副となる。
- 1884（明治17）年 陸軍省官費留学生として、陸軍衛生制度と衛生学研究のため、ドイツ留学。この間、ホフマン（ライピチヒ）、ペッテンコーフェル（実験衛生学，ミュンヘン），ロート（ドレスデン），コッホ（細菌学，ベルリン）に師事。
- 1888（明治21）年 ドイツより帰国。陸軍医学校と陸軍大学校の教官となる。
この頃から日清戦争までの間に造家衛生の論文が多い。
- 1889（明治22）年 最初の妻赤松登志子と結婚。
- 1890（明治23）年 「舞姫」。
- 1891（明治24）年 医学博士（かなり若くして取得）。
- 1894（明治27）年 日清戦争に従軍。中路兵站軍医部長。第二軍兵站軍医部長。
この頃から、脚気にかかわる。細菌説（コッホ説，東大系）を支持。
海軍系と敵対。
- 1895（明治28）年 台湾総督府陸軍局軍医部長。陸軍軍医学校校長。
- 1898（明治31）年 近衛師団軍医部長兼軍医学校長
- 1899（明治32）年 陸軍軍医監，第十二師団（小倉）軍医部長（事実上の左遷）。2番目の妻，荒木志げと再婚。
- 1902（明治35）年 第一師団（東京）軍医部長。
- 1904（明治37）年 日露戦争に従軍。第二軍軍医部長。
- 1907（明治40）年 陸軍軍医総監（中将相当官），陸軍省医務局長。
- 1909（明治42）年 「半日」。以後文学活動を本格的に再開。文学博士。
- 1913（大正2）年 「阿部一族」。
- 1916（大正5）年 陸軍省医務局長を辞職，予備役に編入。「高瀬舟」。

1917（大正6）年 宮内省帝室博物館総長兼図書頭。

1919（大正8）年 帝国美術院院長。

1922（大正11）年 病没。

2. 森鷗外の住環境に関わる著作

軍医が何故住環境の改良に熱意を持ったのか？

当時の陸軍にとって造家衛生改善は重要課題であった。

強健な兵を養成するためには、伝染病をはじめとして様々な病気から守らなければならない。

【公衆衛生学に関する教科書】

「陸軍衛生教程」（1889（明治22）年）

第一編 水。第二編 空気。第三編 土地。第四編 気候。第五編 住居。第六編 掃除。以下、第二十六編まで。

〔内容〕飲用水の水質，一人当たりの用水量，給水法，澄水法，汚染空気，自然換気，人工換気，人体の適温と適湿，局所暖室法と中央暖室法，自然照室法と人工照室法，暗渠下水法など。

「衛生学大意」（1907（明治40）年）

土地。下水。埋葬。上水。都会。家屋。衣服。飲食。

〔内容〕家屋の章で室内環境を扱う。採光窓の割合，二重窓の伝熱，ガス燈使用と一酸化炭素中毒，採暖法など。

「衛生新篇 第1版～第5版」（1897（明治30）～1914（大正3）年）

【建築衛生・建築規則】

「日本における家屋についての民俗学的衛生学的研究」（1888年，ドイツ語）

「日本家屋（説）自抄」（1888（明治21）年） 配付資料8～9ページを参照

「屋制新議」（1890（明治23）年）

「屋式略説」（1891（明治24）年）

「壁湿ノ検定」（1891（明治24）～1892（明治25）年）

「壁湿説」（1891（明治24）年）

「家屋の事」（1892年（明治25）年，「衛生学大意」に所収）

「造家衛生の要旨」（1893（明治26）年）

「家屋（屋式を含む）」（1892（明治25）年）

「家屋」（1914（大正3）年，「衛生新篇 第5版」に所収） など

【市区改正・都市計画】

「日本における家屋についての民俗学的衛生学的研究」（1888年，ドイツ語）

「日本家屋（説）自抄」（1888（明治21）年）

「市区改正八衛生上ノ問題ニ非サルカ」（明治22年）

「市区改正論略」（1890（明治23）年）

「都会の事」（1892年（明治25）年，「衛生学大意」に所収）

「都市，市街」（1897（明治30）年，「衛生新篇 第1版」に所収）

「都市，新街造設ノ計画」（1914（大正3）年，「衛生新篇 第5版」に所収） など

3．住環境調整に関する研究の歴史（明治，大正期）

「計画原論」＋「建築設備」 「建築環境工学」 「環境設備原論」＋「環境設備システム学」
＋「住環境調整工学」

3．1 明治期

1878（明治11）年4月開校 工部大学校「造家」学科（のちの東京帝国大学工学部建築学科）
造家理学（1）音響学，（2）通風及び暖房の方法，（3）衛生上の建築

1）ドイツ式衛生学の実践

森林太郎，小池正直（軍医），中浜東一郎（内務省），緒方正規（東大衛生学教室），
坪井次郎（東大衛生学教室）など

2）欧米技術の吸収（特に，設備）

3．2 大正期

1）日本式衛生学の展開

京都帝国大学医学部衛生学教室：戸田正三，三浦運一，藤原九十郎ら 雑誌「国民衛生」

2) 藤井厚二

1888（明治21）年 広島県福山市の造り酒屋藤井与一右衛門と元の長男として生まれる。

1913（大正2）年 東京帝国大学工科大学建築学科卒業。竹中工務店入社。

1920（大正9）年 京都帝国大学工学部建築学科講師。

1921（大正10）年 京都帝国大学工学部建築学科助教授。

1926（大正15）年 工学博士。京都帝国大学工学部建築学科教授。

1938（昭和13）年 逝去。

「日本の住宅」、4つの実験住宅と「聴竹居」（京都帝国大学に在籍中）

3) 周辺工学分野の展開（特に、設備）

暖房冷蔵協会の発足（1917（大正6）年）

照明学会の発足（1916（大正5）年）

昭和初期に「計画原論」が成立する

4. 参考文献（〔〕内は、熊本県立大学附属図書館所蔵情報）

- [1] 『歴史文化ライブラリー39 森鷗外 もう一つの実像』（白崎昭一郎，吉川弘文館，1998年6月，¥1,785，ISBN：4-642-05439-1）〔書庫，910.268：SH 85，0000200625〕，〔3 F和，910.268：Sh 85，0000218701〕
- [2] 『新潮選書 鷗外最大の悲劇』（坂内正，新潮社，2001年5月，¥1,470，ISBN：4-10-603500-6）〔文庫本，080：43：500，0000263501〕
- [3] 『森鷗外と衛生学』（丸山博，頸草書房，1984年7月，¥4,410，ISBN：4-326-70017-3）〔3 F和，910.268：Ma 59，0000263648〕
- [4] 『森鷗外と下水道』（齋藤健次郎，環境新聞社，1994年3月，¥3,567，ISBN：4-905622-14-X）〔開架2，518.2：Sa 25，0000263534〕
- [5] 『都市叢書 森鷗外の都市論とその時代』（石田頼房，日本経済評論社，1999年6月，¥3,567，ISBN：4-8188-1061-4）〔開架2，518.8：72，0000224649，0000224650〕
- [6] 『新体系建築学 10 環境物理』（新建築学大系編集委員会編，彰国社，1984年8月，¥6,510，ISBN：4-395-15010-1）〔開架2，520.8：KE1：10D，0000086789〕
- [7] 『環境と共生する住宅「聴竹居」実測図集』（竹中工務店設計部編，彰国社，2001年3月，¥2,625，ISBN：4-395-00700-7）〔開架2，527.1：Ta 64，0000251816，

0000253538]

- [8] 『モダニストの夢 聴竹居に住む』（高橋功，産経新聞ニュースサービス（日本工業新聞社発売），2004年1月，¥2,400，ISBN：4-8191-0850-2）〔所蔵なし〕
- [9] 『日本家屋説自抄』（森林太郎，「鷗外全集 第二十八巻」，岩波書店，pp.42～48，1974年2月）〔所蔵なし〕 資料を参照のこと
- [10] 『我國住宅建築ノ改善ニ關スル研究』（藤井厚二，「國民衛生」，第三巻第四號～第四巻，1926～1927年）〔所蔵なし〕 資料を参照のこと

5 . 参考 URL

[1] 講義資料のダウンロード

<http://www.pu-kumamoto.ac.jp/~m-tsuji/kougi.html/jyuu.html/jyuukan.html>

[2] 東京大学工学部建築学科の沿革

[http://www.arch.t.u-](http://www.arch.t.u-tokyo.ac.jp/?%E5%BB%BA%E7%AF%89%E5%AD%A6%E7%A7%91%E3%83%BB%E5%BB%BA%E7%AF%89%E5%AD%A6%E5%B0%82%E6%94%BB%E6%B2%BF%E9%9D%A9)

[tokyo.ac.jp/?%E5%BB%BA%E7%AF%89%E5%AD%A6%E7%A7%91%E3%83%BB%E5%BB%BA%E7%AF%89%E5%AD%A6%E5%B0%82%E6%94%BB%E6%B2%BF%E9%9D%A9](http://www.arch.t.u-tokyo.ac.jp/?%E5%BB%BA%E7%AF%89%E5%AD%A6%E7%A7%91%E3%83%BB%E5%BB%BA%E7%AF%89%E5%AD%A6%E5%B0%82%E6%94%BB%E6%B2%BF%E9%9D%A9)

5. 資料

日本家屋説自抄

凡そ自抄を作る者は其利害の存する所を審かにせずんばならず利とは何ぞや一論文を批評するは其作者の正に最も能くすべき所なり害とは何ぞや自己の作る所の文を抄するに於ては割愛し難き情ありて冗長繁無に渉る處あり且つ他人の文なれば所謂題目八目にて抄録を作るにも多少要別的に其趣意を發見するを得れども自己の文にては此事頗る難し然れども此自抄には成る可くは彼利あつて此弊なきことを勉めたり

日本家屋説は原と獨逸文にて録し日本の家屋の民學的及び衛生學的考察と題し獨逸國柏林府の大學教授ルードルフ・ヴギルヒョウに介し之を伯林人類學會に呈出したるものにして同會にては本年五月二十六日の例會に於て之を會員に公布したり

本文の首は家屋改良の現時の日本にて一大問題となれることを説き次で日本の史を概引し太古穴居の跡より始めて草寮を建たる神代の事に及び古の所謂「タミ」は獸皮などの類をも指し今の「タミ」と殊なるを示し耶穌紀元後百五十年許に板屋の期まり六百年許に法隆寺の屋根に瓦を葺きたること千二百五十年代に紙障子の起りしこと千七百年代に民屋を瓦にて葺きたること等を論じ近年まで關國、殆ど木屋のみを見たるに十數年前、漸く煉瓦にて屋を造ることの諸都會に始まるを云へり

著者は遠く假名川、大阪等の長家建築規則の既に定まると東京市區改正の方策、漸く將に定まらんとするを報じ併せて日本の衛生諸大家、高木、松山等の大日本私立衛生會にて意見を演説したること及び日本家屋に就て今まで檢究せられたる事實を總括し一篇の論文を著すことと徒爲に非ざるを明かにし是れを文の誘導部とす

第一段には日本家屋の部分、即ち壁、柱、蓋屋、仰塵、鋪板、席、戸、隔を叙列し戸に紙障、唐紙、兩戸の別あるを説き次で日本建築の材を論じ建築學士ゴットケトローイの著書を引て木材の利を説き殊に湿度の調節宜きを得るを賞讃し其弊の一あるを擧げたり

二弊とは腐敗と火災なり火災の事は實に歐洲人の意思の外に出づる程にて全日本にて一年に燻滅する家屋の數は平均五萬、即ち全家屋數の〇・七プロセントなり又た東京のみにて一年間に燻滅する家屋の數は平均三千、即ち全家屋數の二・三プロセントなり

火災の多きが爲に土藏と名くる倉庫あり英人の呼ぶ「ゴダウン」(Godown)と稱しアレキサンデル、フオン、プフェルの名を不換塔(der unerschneibare Thurm)と命じたるは是なり著者は此れより土藏の構造を明し次で徳川時代よりの防火法を擧しハインチェルリッングの木材保存書に見たる諸法は宜く日本にて之を援護し其效驗を試みざるべからざるに及び著者は又た平賀源内の火流布防火の説を此に擧げたり

鋪板は日本家屋中、最注意すべき部分なり其下には空氣を含める間隙ありて西洋諸屋の地下の「音」室に相當す、イン博士が日本家屋は空中に浮遊すの言は能く其形を畫き出したたりと謂ふべし彼の日本家屋を以て「マ、レイ」人種の柱屋(Fahnenhaus)に比し其歴史民衆上の連絡を論ぜしは應彌に止まるべし印度に客たりし英人「クニンガム」(Kuningham)が説きたる柱屋の衛生上の利益は直に之を日本屋に應用するも其不可なるを見ざるなり(Medico-topographi-cal report on Calcutta, 1879)

日本屋鋪板下に空氣を存するの制は土地の排水を妨げるの時までは之を廢すべしに非ず家屋の周圍に長草を敷り屋

日本家屋説自抄

下には汚土を除き清砂を盛り之に加ふるに鋪板下の空隙を存する時は以て慮りなかるべし著者は屋下の汚土を除くの事を論ずるに當て松本軍醫總監の說話なりとして往時徳川將軍の宮庭の鋪板下に木炭を埋めたることを引きしが横井第一師團軍醫長が東京の兵營の下へ石炭を敷きたること未だ之を援引するに及ばざりき

西洋にて屋層間に埋むる土質には汚穢のもの多くエムメリヒは會て其衛生上の危害を説きしが(Zetschrift für Biologie, Bd. XVIII, S. 253) 日本屋のタ、ミの間なる毒質も其危險過に其上に出づるものなれ宜く注意して汚穢しきに至らざらむべし

日本家屋に「タ、ミ」を敷きたるは冬季に冷風を下より受くるを防ぐの目的他に坐するに茵を要せざるの利を慮かりたるものなれベルツ其他の諸學士も測定したる日本人下敷の尺度の比較的短、事實は恐くは跪坐の法、宜きを得ざるが爲ならん著者は故に椅子の使用は日本將來の裔孫の爲に已むべからざるものなりと論じて幸も忌憚せざりしなり此尾には傳染病豫防規則の條目を擧げ傳染病者の排泄物の爲に汚された「タ、ミ」は之を消毒し若くは焼却せしむることを言へり

次で論じたるは日本屋内の間取の關係にて日本屋には食堂、臥房なくして不都合を感ぜざる理由を示し又た西洋に於けるが如く貧人の重屋裡に住み或は審室中に居るの憂なきを説き庖厨の事に及び從來の體の不利なることより宇津宮學士の新體の將に都會の民屋に普及せんとする喜びを表したり(東京學藝雜誌に出でし楽電書)

其次には日本の労働社會の爲に建たる長家の事、一二の都會にて之が爲に設けたる規則を論ず

日本屋の換氣は既に諸家の換氣を經たり安香學士は之を東京の民屋に試みて常〇、五乃至〇・六プロミルレの炭酸量を見たりとは石黒軍醫の脚氣談に見えたりとも坪井學士は人の睡りし部屋にて二乃至一九プロミルレを測り得れば常に活しと云難し換氣の多寡は坪井學士の成績を擧示したり

日本家屋説自抄

説て公屋に及べば安香の兵營及び陸軍病院内の空氣の試験あり田原内務省技手東京劇場および諸小學校内の空氣の試験あり著者は本書を引て明細なる數を擧げ之をワオルステル、シヨットキ、ニコルス等歐米諸家の説に照し日本屋の換氣の比較的善良なるを言へり

大抵西洋の劇場には「バルケット」即ち我士間より數層の「ロウジユ」即ち換氣に至るまで空氣中の炭酸量に一定の階級あり其下なる者は少く之を含み其上なる者は多く之を含むこと常なるに我東京の劇場にての成績は全然之と相反し十間の炭酸量最も多く最高の階級にては炭酸量最も少し是れ怪訝す可きなり著者は換氣後戸は時々之を開くこと戸の外は常に外氣と直接に連絡し大に西洋「ロウジユ」の構造と異なるが故に此の別を生ずるならんと説明したり

燻室法に至つては主に日本各地の氣候の一斑を記し日本に産する所の燻材に及び火鉢、胡爐の利害を累論したり

凡そ燻は火籠、熱室及び煙突の三部より成る一を關げれば則ち不可なり火鉢は南亞米利加にもありて「ブラセロ」(Brasero)と呼ぶのなれど火籠のみなり胡爐は火籠と熱室あれども煙突なし用ゆべからざる也

魯國の民は全屋を暖め英佛獨逸等の民は全屋を暖め日本の民は一室の一隅を暖む魯國の寒暖差あるには依るべけれど悉く氣暖しき季節ある以上は宜く相を棄て精を取るべし

然れども日本屋は全體の構造粗なるが故に縱令、精製の燻を置くも温の全屋に行き渡ることは難かるべし然れども此損害は則ち他方には利益となり換氣盛んにして煙突なきの燻をして其害少からしむ妙と謂ふべし若し夫れ火鉢等の酸化炭素を發生するは勿論にて坪井學士も既に之を實驗せられたり

照室法に至つては歐米人の自然照室の程度と實する硝子窓の面積に及び日本屋の紙障の面を測り之を鋪板面に比し一、一平方米突の鋪板面は一、五平方米突の紙障面に相當すべきを見たり唯紙障面の價値は硝子面より劣ること數等なり是

『我國住宅建築ノ改善ニ關スル研究』（藤井厚二）の一部

486 本 多 美 二

5) 故ニ開角ノ過小ニ基ク室内ノ照度及ビ其増加率ニ及ボス影響ハ次ノ如クニ
ニヨリテ補正スルコトヲ得ベシ。

對向物體ノ表面ノ性質ガ、室内ノ照度及ビ其増加率ニ及ボス影響ハ次ノ如クニ

6) 對向物體ノ表面ニ、白色ノ西洋紙ヲ貼布シタル時ト、黑色ノ西洋紙ヲ貼
布シタル時トノ室内ノ照度ノ比ハ、光源ノ方向ニ對シテ、遮光物體ノ有効面積ノ大小
ニヨリテ、差異ヲ免レズト雖モ、大凡1:0.5ナルモノ、如シ。

7) 而シテ開角及ビ入射角ノ増大ニ歸因スル、室内照度ノ増加率ハ、光源ノ
方向ニ拘ハラズ、同一ナルモノ、如シ。

以上ノ諸項ハ自然電燈ヲ光源トシ、開角1°ヨリ10°入射角27°ヨリ72°ノ間ニ於テ、實
測シタル成績ニ基クモノナルコトヲ附記ス。

引用書目

- 1) 保 岡; 建築雜誌 第百九十五號
- 2) 中 村; 國民衛生 第二卷第十號
- 3) 中 村; 國民衛生 第二卷第十號

488 藤 井 厚 二

煩瑣及ビ採光等ハ完全ヲ期シ生活能率ノ増進ヲ計リ、裝飾意匠ニ於テ能ク吾人
ノ性情ニ適應シテ快感ヲ興ヘ各室ノ大小配置ハ宜シキヲ得ルヲ要ス。近時之專
三方面ノ學ニ對スル研究ハ建築家先輩諸氏ノ常ニ努力セル所ナリト雖、其多ク
ハ構造學ニ關スル諸項ニシテ歐米ノ先進諸國ニ於テ既ニ然リ、殊ニ我國ニ於テ
ハ構造學ニ關シテハ佐野工學博士ノ家屋新築構造論、内田工學博士ノ建築構造
特ニ壁體及ビ床ニ關スル研究、近クハ内藤工學博士ノ架橋建築耐震構造論等ノ
發表アリテ世ニ裨益スル所頗ル大ナリ、且ツ近時鐵骨構造鐵筋混凝土構造ノ盛
ニ行ハルニヨリテ構造學ノ研究ハ愈々盛ニシテ多クノ研究成果ヲ發表セ
ラレタリ。然レドモ設備及ビ裝飾意匠ノ學ニ對シテハ其研究成果ノ發表極メテ
稀ニシテ、多クハ只漠然トシテ概括的ニ之ヲ論ジ數量的研究ヲ發表セラレシ
トノ少ナキヲ遺憾トナス。之其學ノ性質上然ラシムル所タリトスルモ科學的解
決ヲ必要トナスコトハ言フヲ俟タズ。

之ヲ住宅ニ就キテ考フレバ吾人ノ最も苦心ヲ要スル點ハ構造ニ非ズシテ設備
及ビ裝飾意匠ノ二者タリ、之等ハ住宅ニ於テハ特ニ頗ル微妙ナル問題ニ接觸シ
テ細心ノ研究ヲ要ス。故ニ之等ニ對シテ研究ハ多種ノ建築物中ニ於テモ住宅ヲ以
テ代表トナシテ論スルヲ妥當トス。然レドモ我國住宅ニ關シテ之等ノ方面ニ對
スル研究成果ノ發表ハ殆ク其存在ヲ知ラズ。余建築ニ關シテ淺學オナリト雖
住宅ニ就キテ深ク興味ヲ有シ、大正四年自ラ設計監督シテ住宅ヲ造リ之ニ住シ
來其不備ノ點ヲ發見スルコト小ナレバ即チ改造シ大ナレバ即チ新築シ、前後ヲ
通ジテ自己ノ住宅ヲ新築スルコト四回ニシテ工成レバ新築ニ移テ起居寢食ノ
間ニ絶エズ且ツ餘ニ研鑽ノ歩ヲ進メテ住宅ニ對スル鄙見ヲ得タリ。然リト雖
住宅ニ於ケル設備及ビ裝飾意匠ノ問題ハ極メテ廣汎ニシテ余ノ研究ニ於テ之ヲ
盡スコト能ハズ、因ツテ其主要ナル點ニ就キテ論シ、特ニ多種ノ建築物ニ對
シテ最も重大ナル問題タル温度湿度及ビ氣流等ニ關スル事項ヲ主題トシテ考

我國住宅建築ノ改善ニ關スル研究

京都帝國大學助教授
藤井厚二

487

我國住宅ニ關スル衛生學的研究ハ數年前ヨリ京都帝國大學醫學部衛生學教室ニ於テ幸先
シテ著手シ、本論文ヲ草スルニ當リ同教室戸田教授ヲ始メ諸氏ノ研究成果ニ資テ所貯ナ
リタル資料ヲ諮詢ス。尙又諸先輩ノ助言ニ據レル所大ナルヲ蒙ラシ。

緒論 第一章

時代思潮ノ變遷ハ著シク其影響ノ及ブ所建築上ニモ瞭然タルモノアリ、宗教
建築ニ於テハ昔日ノ隆盛ヲ見ルコト能ハズ、個人主義實利主義ノ發達ハ住宅ヲ
シテ建築上頗ル重大ナル地位ヲ占ムルニ至ラシメタリ。近時ノ思想ヨリ之ヲ見
レバ何レノ國ニ於テモ其建築ヲ代表スルモノハ住宅建築ニシテ、特ニ歐州ノ大
觀以來住宅ニ對スル諸國ノ問題ハ世界文明諸國ノ重大且ツ緊急ナル事件トナル
ニ至レリ。就中我國ニ於ケル住宅問題タルヤ諸外國ニ於ケルト稍其趣ヲ異ニシ、
其内容ハ極メテ複雜ニシテ生活ノ根柢ニ動搖ヲ來シ國民ハ歸趨スル所ヲ知ラズ、
之ガ解決ハ國民生活上ノ一大要點タリ。然レドモ世ノ之ヲ論ズルニ當ツテ多ク
ハ机上ノ空論ニ終リ其眞髓ニ關ル、モノ極メテ稀ニシテ五里霧中ヲ彷徨スルノ
感アルハ吾人建築家モ亦之ガ實ヲ感ゼザルベカラズ、即チ茲ニ解決ノ一助トシ
テ建築學上ヨリ實驗的理論的考察ニヨリテ吾人ノ生活ニ適合スベキ住宅ニ
就キテ論セント欲スル所以ナリ。

多クノ建築物ハ其設計ニ際シテ建築學上ノ必要ナル研究ハ之ヲ大別シテ構造
設備及ビ裝飾意匠ノ三方面トナス、即チ建築物ハ構造ニ於テ堅牢ニシテ風、雨
火、震、災、及ビ腐朽等ニ對シテ安全ニ、且ツ設備ニ於テ衛生的ニシテ換氣、

究セント欲ス。

第二章

本章ヲ分テテ論述スルニ先立テ「我國住宅」ナル語ニ對シテ其意義ヲ明カニ
ナスヲ順序トス。

住宅トハ如何ナルモノナルヤニ就キテハ先人ノ説明ニ據ラザルモノハ單ニ
語句ノ相違ニシテ、要スルニ「住宅トハ人類ガ居住ノ目的ヲ以テ使用スル建築
物（建築物トハ地上ニ固定セル構造物）ヲ稱スルナリ、故ニ住宅ト稱セルベ
キ建築物ニ於テモ頗ル多種タリ。即チ居住ノ方法及ビ建築物ヲ使用スル家族
ノ數ニヨリテ大體工學博士（工業大辭書中ノ）ニ從ツテ區別セバ、

- (一)、一屋ヲ一家族ノ住宅ニ使用スルモノ。
- (二)、一屋ヲ數家族ノ住宅ニ使用スルモノ。

- イ、割長家ノ類、數家族同一層ニ居住セルモノ。
- ロ、割住居ノ類、階ヲ異ニシ一層ニ數家族ノ居住セルモノ。
- ハ、棟割長家ノ類、一屋ニ背合ニ數家族ノ居住セルモノ。

トナス。而シテ(一)ヲ獨立住宅ト稱シ世ノ住宅ノ大部分ハ之ニ屬ス。然レドモ
獨立住宅ニ於テモ居住者ノ貧富ノ程度如何ニヨリテ甚シキ懸隔ヲ生ジ、王公貴
族ノ邸宅ト貧民ノ茅屋トハ月電ノ差違アリ。因ツテ之等ノ兩種階ヲ除ク所謂普
通住宅ヲ以テ獨立住宅ノ基準トナシ、單ニ住宅ト稱フルトキハ學術的ニモ通俗
的ニモ獨立セル普通ノ住宅ヲ意味スルヲ常トス。故ニ余モ亦之ヲ以テ上述セル
多種ノ住宅中ノ代表トナシテ論ズルノ當然ナルヲ信ズ。

我國ノ二語ヲ冠シタル所以ニ關シテハ、我國現代ノ物質的文明ハ概シテ歐
米ノ先進國ニ採リテ其模倣ノ及バザルヲ惟慮ルノ感アリ、從ツテ國民生活ニ
於テモ彼ノ生活ヲ模シ歐米化セル住宅ヲ以テ文化住宅ト信ジ彼ヲ全ク模寫セシ

『我國住宅建築ノ改善ニ關スル研究』（藤井厚二）の一部（10 ページとは、別の号に掲載された部分）

650

藤井厚二

平家建住宅ト二階建住宅トハ生活ノ能率ニ非常ナル懸隔アリテ、前存ニ比シテ後者ノ甚シク不便ナルコトハ兩者ニ比較居住セバ極メテ明瞭ナルモ、比較居住セシ人ノ少ナキヲ以テ痛切ニ感ズズ從テ此言ヲ多ク聞カザルナリ。余ノ経験ニ於テハ、第一回住宅二階建、第二回住宅平家建、第三回住宅二階建、第四回住宅平家建ナリ。

且ツ住宅ヲ自然界ト融和セシメテ快感ヲ得ントスルニハ平家建ヲ以テ最も適當トナス。

(二) 大サハ比較的小トナシ其設備及ビ裝飾ヲ完全ニナスベシ。

子孫ニ傳ヘント欲シ其代々ニ於ケル必要ヲ豫想シ、之ニ適應シ得ル大ナノ建築ヲナスハ極メテ愚タルノミナラズ、自己及ビ家族ノ將來モ約十年程ヲ豫想シテ以テ計画ナスベキナリ。

(三) 一室ヲ數多ノ目的ニ使用セント欲スルハ不可ナリ。

舊來ハ一室ヲ食堂應接室居間寢室等ニ兼用セルモ、カ、ル場合ニ於テラハ空間ハ頗ル經濟ナルモ設備ハ完全ニナシ得ズ何レノ目的ニ對シテモ極メテ不便ナリ。總テ種々ノ異ナリタル用途ニアルヲ兼用セル場合ニハ其用途ノ種類多キ程且ツ交代ノ頻繁ナル程多クノ不便ヲ増ス、故ニ生活ノ極メテ單純ナリシ時代ニアリテハ可ナルモ、現今ノ如キ複雑ナル時代ニ於テハ其生活ノ程度ニ應ジ、相違セル用途ニ從テテ各室ヲ夫々區別ナスベキナリ。

以上ヲ三大要點トナシ尙之ガ細目ニ關シテハ、

(一) 若シ二階ヲ設ケル場合ニハ之ニ昇降ノ主階段ハ階場ナキ直線階段或ハ廻リ階段ハ絕對ニ避ケ、極メテ容易ニ昇降シ得ルモノヲ設ケベシ。居間其他室内ヨリ直チニ昇降ナス時ハ其室内ニアル人モ階段ヲ昇降ナス人モ共ニ不愉快ヲ感ズルノミナラズ、階段室ハ屋内氣流ノ通路トナリテ階上ニハ汚染セラレタル空氣ノ滲渡スルヲ以テ（高津寄著醫學博士日本家屋ノ研究換氣

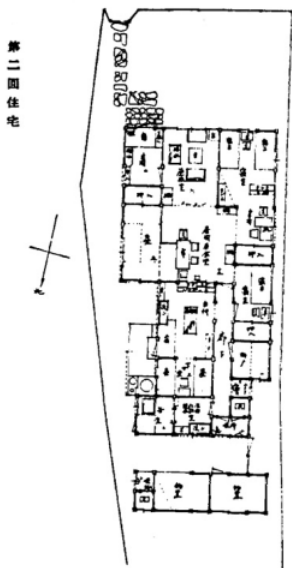
652

藤井厚二

面圖及ビ第四回住宅平面圖參照)

(四) 食堂ハ毎食事ニ對シテ一回一時間ヲ費ストセバ一日中ニ僅カニ三時間ヲ費スノミナル故、特別ニ設ケタル得ザル場合ニ於テハ居間内ノ一部ヲ其用ニ供スルヲ可トス。（第四回住宅平面圖及寢室第二圖參照）

(五) 寢所ト食堂トハ相接スルカ或ハ中間ニ配膳室ヲ設ケ、廊下其他ニヨリテ兩



我國住宅建築ノ改善ニ關スル研究

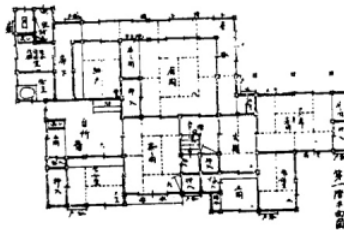
651

ノ部參照) 階段室ヲ獨立シテ設ケベキナリ。（第一回住宅平面圖及ビ第三回住宅平面圖參照）

(二) 棟測ヲ設ケル場合ニハ之ヲ變ジテ「ベランダ」トナスヲ可トシ、其「ベランダ」ノ周圍ハ硝子障子ヲ嵌ムレバ嚴寒ノ候或ハ風雨ノ際ニ於テモ使用シ得テ便ナリ（第四回住宅平面圖參照）

(三) 上述ノ如ク各室ノ用途ヲ分ツニ居間ト寢室トノ區別ヲ原則トナシテ其設備ヲナス。應接室(客室)書齋其他ノ室ヲ必要トスル場合ニハ、書齋ハ寢室ノ應接室ハ居間ノ一部ヲ兼用ナスカ或ハ特別ニ室ヲ設ケ。（第二回住宅平

第一回住宅



我國住宅建築ノ改善ニ關スル研究

653

者ノ關係ヲ遮断セシムベカラズ（第一第二第三第四回住宅平面圖參照）

(六) 床ノ間ハ能ク限リ減少セシムベク舊來ノ和風住宅ニ於テハ濫設ノ弊アリ。

